

33

特220

794

光明園叢書第一輯

最後の日

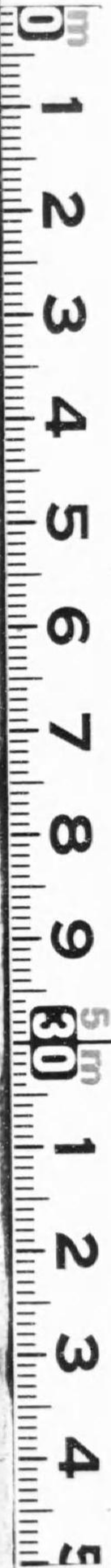
住岡狂風著



發行部 光明園本行 日本 眞口本

343

444



始



特220
794



光明團叢書第一輯

最後の日

住岡狂風著



自序

『祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現す。驕れる者久しからず、只春の夜の夢の如し。猛き人も遂には亡びぬ。偏に風の前の塵の如し。』とは平家物語の言葉であつた。最後の日——何といふ嚴肅な言葉であらう。生れたものは必ず滅び、盛なるものは遂に衰へる。初めに喜んで後に泣き、初めに楽しんで後に苦しむ。生滅轉變、榮枯盛衰、人間の歴史も亦この相を追へるものにすぎず、なつかしき繪巻物は、この變轉の間に綴られる。

古の聖者は、聖き廣き智慧もて不生不滅不去不來………生死一如、生として喜ぶべきなく死として悲しむべきものなく、

法相第一義一切空に安住したと傳へ聞く。されど我等はもとより聖者ではない。もの盛なれば喜び、もの衰ふれば悲しむ。されど、古の聖者達人と雖、何等の工夫なくしてかゝる超越境に至つたのであらうか。生を喜び、死を悲しむ凡心をかこち深刻に世の無常に徹して求道精進の末至りつくした世界ではあるまいか。

こゝに光明團第一叢書として、過古に光明や聖光にのせたものの中から數篇をおさめ多少訂正して、『最後の日』と題し發刊し、最後の日に輝ける人々の相をしのびつゝ、我等が生活の指針にもとこの一冊を同胞の机上におくる。

盛なるもの必ずしも勝利者にあらず、亡ぶるもの必しも敗北者にあらず。悠々として西に沈む太陽の如く、紅にほふ紅葉の

如く、最後の日にこそ、ものの眞價は現はれるのではあるまいか。我等の生の終焉よ。そは何によつて飾されるのであらうか。世の相の移變のの様も、飛鳥川の淵瀬たゞならず、治亂興亡、永遠に大地の涯までやむべくもなし。

かゝる世に生きる人の子、我等も亦一切を越えて、大地の勝利者とならねばならない。佛の道はこゝにある。この一冊の中に同胞たちの胸底の琴線にふれる何ものかゞあることを信じて疑はない。そは過古の偉いなる人々の足跡の記録だからである。同胞の愛讀書の一つともなれば幸である。

昭和七年二月一日

本部にて

狂風識

最後の日

目次

| | | |
|--------------------|-----|----|
| 最後の日 | ……… | 一 |
| 恩讐の彼方に | ……… | 二三 |
| 利休の最後 | ……… | 五二 |
| 大命將に終らんとするや悔懼ともく至る | ……… | 六二 |
| 父の最後 | ……… | 七七 |
| 大自然に親しむ者 | ……… | 九五 |

最後の日

×

元暦二年三月二十四日

源平二氏は西海壇浦にこゝを最後と戦ふてゐる。しかしもう戦の数は決した。源氏の兵は平家の船に乗移つて来る。水主どもは或は射殺され或は斬殺されて、もう船は動かかない。

「新中納言知盛の卿、小船にのりて急ぎ御所の御船に参らせ給ひて、世の中は今ばかりと見え候。見苦しきものどもをば、皆海へ入れて、船の掃除めされ候へとて、掃いたり、拭いたり、塵ひろい、舳艫に走りまはりて、手づから掃除し給ひけり。……」

二位殿(平清盛の妻)は、日頃より思ひ設け給へることなれば鈍色のこぎぬ打ちかづき、ね

り袴のそば高くとり、神璽を脇にはさみ、寶劍を腰にさし、主上(安徳天皇)を抱き参らせて
 我は女なりとも、敵の手にはかゝるまじ、主上のお供に参るなり。御志思ひたまはん人々
 は、急ぎつゞき給へとてしづくと舷へぞ歩み出でられける。主上今年は、八歳にぞならせ
 おはします。御年のほどより遙にねびさせ給ひて、御かたちいつくしく、傍も照り輝くばか
 りなり。御髪黒くゆらくと、御背中過ぎさせ給ひけり。主上あきれたる御有様にて、そも
 くあませ(あませとは尼御前のこと)我をば何地へ具して行かんとはするぞ、と仰せければ
 二位殿幼き君に向ひ参らせ、涙をばらくと流して、

「君は未だ知し召され候はずや、先世の十善戒行の御力によりて、今萬乗の主とは生れさせ
 給へども、悪縁にひかれて、御運既につきさせ給ひ候ひぬ。先づ東に向はせ給ひて、伊勢大
 神宮に御暇申させおはしませ、其後西に向はせ給ひて、西方淨土の來迎にあづからんと、誓
 はせおはしまして、御念佛候ふへし、此國はそくさんのへんど(粟散の邊土)と申して、物
 憂き境にて候、あの波の上こそ極樂淨土とてめでたき都の候、それへ具し参らせ候ぞ」

と。

様々に慰め参らせしかば、山鳩色の御衣にびんづら結ばせ給ひて、御涙におぼれ小さく美
 しき御手を合せ、先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮、正八幡宮を御暇申させおはしませ、
 其後西に向はせ給ひて、御念佛ありしかば、二位殿やがて抱き参せて、波の底にも都の候ぞ
 と慰め参らせて、千尋の底にぞ沈み給ふ。

悲しきかなや、無常の春の風、忽に花の御姿をちらし、いたまじきかな、ぶんだんの荒き
 波、玉体を沈め奉る。……………。(平家物語)

X

盛なる者は必ず衰へる。

哀れ、平家の末路の華々しくも亦尊ことよ。

保元の亂この方、住みなれし花の都も、今は木曾の冠者義仲の粗野に荒されて、一門こと

く主上西海の御幸に随ひたてまつる。

一の谷の戦にもやぶれ、屋島にも、寶篋ながくとめさせられず、幾多の哀話を綴りつゝも、壇の浦に潔く滅ぶ。

滅ぶものは滅ぶ。

しかも其滅ぶ日に従容として亂れず、自若として其道を守るは、我が武士道の生命ではなかつたか。

我、盛なるものを、必ずしもほめたゝえず、衰へるものを必ずしもさげすまず治亂興亡は生死苦海の一時の相にすぎない。

榮えしものは如何にして衰へしか、衰へるものは如何にして衰へしか、其間に輝くものは何ぞ、其すがたは如何に、

至て最後の日のすがたは悲劇である。其處に涙があり、血がある。

悲劇の中心は苦惱である。

詩もこれあるがために生れ。藝術もこれに生命を持つ。

宗教にいたつては、苦の中に試練されず、苦の中より生み出されないものであるならば、そは一片の閑人の閑葛藤である。

X

平家の一族はことごとく都を落ちた。

薩摩守忠度は、どこから歸つて来たのか、五六人の侍をつれて、五條の三位俊成卿の邸の前に立つた。門は閉ぢられて開かない。落人がかへつたとて、何だか内はさしがしい様子、忠度は馬よりおりて、高らかに申される。

「外の者ではありませんね。忠度、三位殿に申すべきことあつて、引かへしてまいりました。三位殿に是非お願ひがあります。假令門は開かれずとも、この所まで御出で下さい。」

忠度とわかつて、門は開かれて、對面される。

話の要点はこうである。

『御無沙陀のみでありました。いよく、君には帝都を出させたまひ、平家一門の運命もはやつきはてしました。つきましては、以前、勅撰の和歌集が出来るといふことを聞きましたが生涯の面目に一首でものせて頂きたいと存じておりましたが、こんな亂世になつて、其お沙汰がなくなつたことは嘆かほしいことでもあります。この後世が静まつて、撰集の御沙汰がございましたらこゝに、持参しました卷物の中に、日頃詠みおいた歌どもの中から、秀歌と思はれるもの百餘首ほど書き集めてありますから、一首なりともおのせ下さるならば、後の世の思出ともなりませう。』

とて卷物を出された。

俊成卿はこれ聞いて、

『かゝる忘れがたみどもを賜りました上は、ゆめ／＼疎略は致しませぬ。さてもさても其心根、情も深う哀も殊に勝れて、思はず涙いたしました。』

と宣へば

薩摩の守は

『今はもう、屍を山野に曝しませうとも、浮名を四海の波に流しませうとも、浮世に思ひおくこともありません。さらばお暇申します。』

とて西の方に馬を急がせました。

今はのきはに、和歌を知る人に托して死出の旅につく心根、
花の都の最後の日は悲しくも哀れである。

やがて千載集が撰れた時、よみ人知らずとして載せられた一首は、忠度卿の歌であつた。

さゞなみや

志賀の都は荒れにしを

むかしながらの山ざくらかな

最後の日！

其處にものゝ本質と赤裸々な相が表はれる。

『おちぶれて袖に涙のかゝる時

人の心の奥ぞ知らるゝ』

盛なる時に追従する者は多い。

零落の日に共に手をとつて泣く人は少い。

三百數十人の家中から、四十七士を出した赤穂藩はそれだけで萬丈の氣焔である。

X

X

承安四年、法然上人一たび黒谷をいで、京都吉水に念佛易行の大道を宣べたまふや、其名聲は日本國中に傳つた。念佛の大法は草の風になびくが如く

『農夫がすきをふかむ念佛をもつて田歌となし

織女が糸を引く、念佛をもつてたてぬきとす

鈴を嘯らす驛路には、念佛を唱へて鳥をとり

船ばたをたゞく海上には、念佛を唱へて魚をつる。

雪月花をみる人は

西樓に目をかけ

琴詩酒を弄ぶともがらは

西の枝の梨子を折る。』とか

南北の僧徒とても人である。嫉妬の双は、この吉水の上にむけられ。時も時とて、女官た

ちの出家は、はしなくも上の御憤にふれ、遂に吉水の教團はふみにじられて、念佛禁制の札

は高くかゝげられた。

哀れ打首、流罪

大地の上は痛ましくもためされる日がきた。

法然上人を思ひ奉る弟子たちは上人をとひ、

『何卒、今暫くの間、朝暮の御念佛をやめさせられたまへ、然れば事も静まるでございませう。御老体ゆえ都に住はせ給はねば……』』

と申しあげると、善慧坊其他の一座の人々にむかつて。

『汝等は經釋を見ないのか。』

假令源空は之がために死刑に處せられるとも變ずることはできない。よし我舌は念佛を稱へるによつて寸斷さるゝ事があつても、如何で念佛を止めることが出来ようか、考へても見よ。今日我が弘通する所の念佛は、まさにこれ大聖世尊の出世の本懐ではないか。十方恒沙の諸佛も既に之を證誠し善導大師は本願の念佛を往生の最要と教へ給ふたではないか、我は今その流をくむ身でありながらどうして念佛を行ぜないでゐられるか。

驛路はこれ聖者のゆく所である。

配所はまた權化の住所である。

憂ひとするに及ばず、悲みとするに足らない。

邊鄙は未だみ法に浴してゐない。

流されることによつて邊鄙の群衆の濟度ができるならばこれにこしたことはない。これ悦びであつて悲しみではない。』

念佛は行者の生命である。

終日行すれども自の行を行するのではない。正覺の全生命は、行者の念佛の根底である。念佛の聲のする所、其處こそ如來のまします所である。

さはさりながら、愛別離苦は凡夫にとつては最大の苦惱である。

花が散るように、師も弟子も散つてゆく、吉水最後の日 pensando 涙せぬものがあらふか。

形の上で吉水教團には最後の日 came。形がこはれた時、惡魔はものすごく笑つたであらふ。

しかし眞實なるものは、其形の興亡を越えて生へぬ。

一切人の上に死がくる。

病が重くなる。——借物も駄目、化粧も駄目。赤裸々な人間が横たはる。名譽、地位、財産、そんなものが遠のく。

子供、妻、夫、親、友人、それらの手がとどかぬ世界の門がひらく

醫者、看護婦、藥、食事、それが間にあはぬ。

たつた水數滴が唇をうるほす。

其最後の日に何があらふ。

最後の日、寂しいけれどこの言葉は、私に深い内省を興へてくれる。さうして私にほんとうの生き方を教へる。

X

アテネの街には、貧しい老哲人ソクラテスが

『徳を愛せよ。而して智識をのぞめ。』

と叫びつゞけて歩く。彼の前には何者も眼中にない。唯彼が信ずる神があるばかりだ。

汝自身を知れ!

神を信じよ。何故に金銭と名譽の事のみと思ひ煩ふや、智識を求めないか、眞の神に服従しないのか！

彼の舌端は火よりも熱い。

アテネの最高權威を握つてゐる皮商人アニタスは、自分の權力の前には何者も頭を下げると信じてゐた。事實彼の前に頭を下げぬ者とはなかつた。然るに彼を正面からこぎ下し、苦言を提してはゞからぬ者はソクラテス一人である。彼の子供の養育に對してやくざものになすと忠告したゞけである。

アニタスの怒を買つたソクラテスは、アテネの大公會堂に引き出されて、市民から選ばれた五百人からの裁判官の前に罪をさばかれることになつた。

噫——

何たる愚なる裁判ぞ！

七十歳を超えた哲人ソクラテスは無意味なる裁判の席にひき出された。

『アテネ市は今日、ソクラテスの罪状を決定するために、この裁判を開いたのである。かれが有罪であるか、無罪であるか、彼を死刑に處するか、放免するか。諸氏の裁判を求める。』と裁判長が宣言する。先づ被告の申立が聞かれた。ソクラテスは立つた。彼の人格は少しも取亂れない。沈着の態度には少しの變化もない。

『……諸君の裁判が私をかりに無罪にしてくれた所で、有罪とした所で、私のゆく道に變更はありません。』

お——

私のゆく道に變更はありません！

何たる強者の聲ぞ、

其處へ全人格をあげての一本道が見える。世間の風模樣位のこと動かすことの出来ぬ眞實の道がある。

この一本道に立つかぎり、富貴も淫する態はず、威武も屈することは出来ない。

『私は依然として叫ぶであります。』

アテネの人よ、私は眞に諸君を尊敬します。また愛します。しかし私は諸君に服従するよりも神に服従します。と。

諸君よ私は將來、餘命のある限り、力のある限り、偉大なるアテネの市民よ！ 諸君は何故に、金錢名譽の事のみを心に用ひて、智識と眞理を求めすることに努力しないか！ 正しい神を信じないか。

と叫んでやまないであります。

其處には妥協もなく哀願もない。憐みを乞ふために一言も使はない。いゝえ彼はこの死の幕のとなりに來つて猶、力強く権力と不正とを罵つて正義を主張する。

かうした場合に権力は必ず、彼を虐げる。

『ソクラテスを死刑に處す。』

『死刑の宣告は謹んで拜聴しました。』

彼の態度は變らない。怒もなければ恐もない。

『皆様には一個のソクラテスを殺して何になります。……』

私は老人です。

長く生きる身ではありません。死刑にされて何の差支がありません。唯、私を死刑に處せられる皆様に一言聞いて頂きます。

死とは何ぞや、——與へられた死とは何でせう。或る者は死は無の世界だと云ふ。また或る者はこの世からあの世への變化にすぎぬといふ。若し死が無意識の境地で、長い眠りだとすれば、死ぬことは誠に結構な事です。なぜならば永久なる一つの熟睡と同一だからである。これに反して若し死が、この世からあの世にゆく變化であつてそこには昔の死者が全部存在するものならば、死ほど面白いことはない。

そこには正しい裁判官がおりこの裁判をあの世で再び受けることができるならば、それこそ私がお願ひして行きたい旅行である。若しそこにオーピアスやホーマーといふやうな死んだ偉人がゐて、快談することができるならば、私はどんな犠牲をはらつてもそこに行きたい

然り！

若しこの説に偽がないならば私をして、何回でも死なしめよ！

何回でも私はそこがなつかしい。私はそこで猶、智識をおふことができる。その裁判はこんなつまらぬことで死刑を與へるわけではない。

裁判官諸君！

私の死を喜んで下さい、善人には如何なる場合でも、悪い結果が来るものではない。

最後にお願ひします。私の子孫が若し、徳を愛することが富を愛することよりも弱かつた場合には、何卒彼等を罪して下さい。』

何たる公明正大ぞ！

一言一句、悉く名言ではないか寶玉ではないか。

公判はとぢられた。裁判官が皆ひき上げやうとした時である、彼はかの有名な一句を叫んだ。

『今こそ別れる時が来た。』

我等は各定められた道をゆくのだ。

私は死の道に

諸君は生きる道に

併しいづれがいゝかを知つてゐる者は誰ぞ！』

五百の市民肅然として足をとどむ。

果してソクラテスの道は死の道か。愚かなる権力者の道が生きる道か。いづれが正しい道かを知るものは誰ぞ！

沈黙の胸に、聲あり、この聲をきく者、何ばくぞ。この聲を聞く世界、我等はこれを信とよぶ。

哲人ソクラテスは愚なる権力の前に死刑になるのだ。

弟子のクリートが、牢から逃げよとすすめた。

『私に逃げよといふのか、』

私は半世紀の間、法律に従順であれと説いてきた。今になつて一生の誓を棄てよといふのか。私は長い間、市民としての特權と自由とを享受してきた。然るに今死刑の宣言を受けたからとて、死を恐れて法律を破り、愛するアテネの街をあとにして逃げよといふのか。私は私の言を破ることはできない。』

いつまで行つても二つの道はない。二つの道のない者には迷ひはない。

年一回のにぎやかなお祭の日、市民が安價なる歡樂の空氣に踊り狂ふ日に、不朽の大哲人は死んでゆく。

彼は常に變りはない。女をさけて男子の友人にとりまかれつゝ正義を語ることに變りはない。

彼は入浴して体を清めた。死の床は用意されてある。彼は毒藥の杯をとりあげた。そして

氣輕にのんだ。友人たちが泣いてゐるのを平氣で、なぐさめなだめて、立つて部屋の中を歩く。

『少し足がおかしくなつた』

毒杯を興へた獄卒は、

『どうぞこちらへ寢て下さい。』

老体は死の床に横たはる。手足の色が變る。股のあたりがつめたくなる。

この毒が心臓まで來れば、それでおしまひだ。

沈黙

墓場のような静けさ、それが又破れた。

『グリートよ。私はいつか、アスクレピアスに雞を一羽借りておつた。あれを忘れてゐた。返してくれないか。』

間もなく彼の平和な呼吸はたえた。

偉大なる死よ。

一切を棄て、真理の殿堂にかけ登つた哲人の強さ。

我等はこの精神の一片をでも我等の一生に織り込みたい。

恩讐の彼方に

恩讐の彼方に

恩讐の彼方に

極 惡

若い旅人夫婦を手にかけた市九郎は、深い良心の苛責に囚はれながら歸つて來た。そして家にはいると、直ぐ様、男女の衣裳と、金とを汚らわしいものゝやうにお弓の方へ投げやつた。女は悠然として先づ金の方を調べて見た。金は思つたより少く、二十兩を僅かに越してゐるばかりであつた。

お弓は殺された女の着物を手に取ると、

『まあ黄八丈の着物に紋縮緬の繻袴だね。だが、お前さん！』

此女の頭の物は、何うおしだい。』

彼女は詰問するやうに市九郎を顧みた。

『頭の物？』——市九郎は生返事をした。

『さうだよ。頭のものだよ。黄八丈に紋縮緬の着付ぢや、頭のものだつて、擬物の櫛や笄ぢやあるまいぢやないか。わたしは、先刻あの女が菅笠を取つた時にちらと睨んでおいたのさ、瑛璃の櫛に相違なかつたよ。』と、のしかゝるやうに云つた。

お弓はさらに、殺した女の頭のものなどは夢にも思つてゐなかつた市九郎にむかつて、『お前さん！ まさか取るのを忘れたのじやあるまい。瑛璃だとすれば、七両や八両は確だよ。駈け出しの泥捧ぢやあるまいし、何のために殺生するのだよ。』

あれだけの衣裳を着た女を殺しておきながら、頭のものに氣がつかないとは、お前は、何時から泥捧稼業にお成りだえ。何と云ふどじをやる泥捧だらふ——。何とか云つて御覽！』

お弓は市九郎に喰つてかかつた。

市九郎は、江戸浅草田原町の中川三郎兵衛の仲間奉公をしてゐる中、主人の愛妾お弓と不義をしたのだつた。その不義が主人に知れ、老年の主人が成敗の劍を振り上げたとき、命惜しさに逃れやうとしてゐる内、つひ主人を斃してしまつたのだつた。江戸を逃れて流浪の旅をつゞけた果、今木曾山中で悪事の數を重ねてゐるのである。この女のために主殺しの大罪

を犯したのだつた。この女のために、底も知れぬ極悪の數々を重ねてゐるのだと思ふと、市九郎の心にはお弓に對する反抗心が勃然として湧いて來た。

二人の若い男女を殺してしまつた悔に心の底まで胃さかかてゐた市九郎は、お弓から責められても、それを悔いる心はなかつた。それよりもお弓が自分の同性が無慘にも殺されて其下衣までが、殺戮者に對する貢物として自分の目の前に晒されておりながら、尙その飽き足らない慾心は、流石悪人の市九郎の眼をこぼれた頭のものに迄及んでゐる。さう考へると市九郎は、お弓に對する、ゐたくまらないやうな淺ましさを感じた。この市九郎の心の激變を全く知らないで猶も彼に残りの物を取つて來るやうに云つた。しかし市九郎は考へこんで動かない。仕方なくお弓は、殺した場所を聞いて、裾をはしおつて駈けだした。

新生のひらめき

自分の命を賭してまで得た女が、僅か五兩か十兩の髪の毛の物のために、女性の優しさの全てを棄て、死骸に付く狼のやうに、殺された女の死体を慕ふてかけてゆく。市九郎は心の底か

ら浅間しく思はずにはゐられなかつた。

彼はもうこの罪惡の棲家に、この女と一緒に一刻もゐたままになつた。

自分の今迄犯した惡事が、一々蘇つて自分の心を喰ひ割いた。

絞め殺した女の眸や、血みどろになつた商人の呻き聲や、一太刀浴びた白髮の老人の悲鳴などが一團になつて市九郎の良心を襲ふた。

彼は一刻も早く自分の過去から逃れたかつた。彼は自分自身からさへも逃れたかつた。まして自分の凡ての罪惡の萌芽であつた女から極力逃れたかつた。

彼は決然として立ち上つた！

彼は家を出た。

そして今一度販つて、持つて出やうとした衣類もさつきの金も悉く盗んだものであることに氣づく、それを家の上りがまちへ力一ぱい投げつけた。

お弓に會はないやうに、間道を木曾川に添ふて一散に走つた。何處へゆくといふ當もなかつた。彼はたゞ罪惡の根據地から一寸でも、一分でも遠い所へ逃れたかつた。

姦通！ 主殺し、駈落、強盜、殺人、淫蕩……………。

そこにも、惡質の腫物をかくやうな、不健全な快感がある。

貪れば貪るほど、傷の深さが増してゆく。

これにも似たる不健全な趣味が誰の上にも開け易い。

道義を無視しなければ出來ない快樂、弱者に彈壓を加へなければ行ひ得ない快樂、多くの人を傷つけないければ行へない快樂、良心を殺さなければ行へない快樂、それに陥り易いのが人間性である。

然し人間は如何に惡事に溺れても、何かの機縁にふれば、其底に輝く見々たる靈性に蘇る。

市九郎の心にこの輝きが生れた。

彼は今、失心したやうに、狂者のやうに走る。

彼は一体何ものによられたのか。

我等は今微かに、彼の上に彼ならざる彼を見る。

尊き悲嘆

二十餘里の道を、彼は山野の別なく唯一息に走せて、翌る日の午下り、美濃國の大湊在の淨願寺に駆け込んだ。市九郎は淨願寺の現住明遍大徳の袖にすがつて、懺悔の眞を致した。

上人はこの極重悪人をも捨てなかつた彼は上人の手によつて出家得度して了海と法名を呼ばれ、只管佛道修業に肝膽を砕いたが、道心勇猛のためか、僅か半年足らぬ修業に、行業は氷霜よりも皎く、朝には三密の行法を凝し、夕べには合掌念佛の安座を離れず、二行彬々として豁然智度の心萌し、天晴れの智識となつた。彼は道心が定まつてもう動かないのを自覺すると師の坊の許しを得て、諸人救済の大願を起し、諸國雲水の旅に出たのであつた。

彼は先づ京洛の地を志した。彼は多くの人を殺しながら、縦令僧形の姿となるとも自分が生きながらへてゐるのが心苦しかつた。

木曾山中の罪惡を思へば、道中の人々に對して、償ひ切れぬ負担を持つてゐるやうに思はれた。

道路で難澁の人を見ると、彼は手を引き腰を押してその道中を助けた。

橋の破壊されたのを見れば修繕し、路の崩れをなほして、只管善根を積むことに腐心したが、身に重なる罪は、空よりも高く、積む善根は土堆よりも低いのを思ふと、彼は今更に半生の惡業の深さを悲しんだ。市九郎は、些細の善根によつて、自分の極惡の償ひ切れぬことを知つて心を暗くした。

一言の惡が全人格の問題となる。

一行の罪惡が全人格の問題となる。

ちつとしてはゐられない。積んでもく、如何なる善もこの惡よりも軽い。この悲哀に泣いたのが法然といはず。親鸞といはず、過去の聖者たちの心境ではなかつたか。

自己の罪も惡も棚にあげて、悲奮し、慷慨し、怨憎する、その粗野な荒くれた心から一体

何が生れやう。

使 命

彼市九郎は、幾内中國を通つて亨保九年秋、海を渡つて九州小倉に至り、豊前の國宇佐八幡宮を拜し、山國川を溯つて耆闍崛山羅漢寺に詣でんものと、道を山國川の溪谷に添ふてたどつた。

それは八月に入つて間もない時であつた。淋しい種田驛で晝食をとつた了海が、更に山國川を添ふて火山岩の河岸を、杖をたよりにたどつてゐる時ふと、此邊の農夫であらう。四五人の人々が罵り騒いでゐるのを見た。市九郎が近づくとその中の一人は、

『これはよい所へ來られた。非業の死を遂げた哀れな亡者に、通りかゝられたを縁に、一遍の廻向をして下され』といつた。

彼は經を廻向して、その死人の事情を聞いた。それは鎖渡しの難所の中途で馬が狂ふため五丈に近い所から真逆様に落ちて無慘な最後をとげたのである。この難所では一年に三四

人、多ければ十人も、かうした憂目を見るものとである。

彼は絶壁の中腹に、松、杉などの丸太を鎖で聯ねた棧道が、危げに渡つてゐるのを見た。かれはこの仰いで十丈伏して五丈、人の命をとるこの絶壁を見た。漸く渡り終つて絶壁を振り向いた刹那、彼の心には咄嗟に大誓願が、勃然として萌した。それはこの二百餘間の絶壁をくり貫いて道を通じようといふ、不敵な誓願であつた。

彼は求めて歩いたものが、漸くこゝで見つかつた。一年に十人救へば、十年には百人、百年千年を経つ内には、千萬の人の命を救ふことが出来ると思つたのであつた。

彼は今、かれ自身でなければ出来ない、大いなる使命を見出したのだ！

誰の前にも、彼でなければ出来ない使命が訪れる。

その聲が、覺めた者にしか聞えない。

それを知る。知つても、其機會をとりがす。

凡々の一生を終るのか。大きな足跡を地上に印するのか。

獨力

彼は羅漢寺の宿坊に宿りながら、村々を勤化して、隨道開鑿の大業の寄進を求めたが、何人も此の風來僧の言葉に、耳を傾ける者はなかつた。

『三町をも超える大盤石を、くり貫かうと云ふ瘋狂人ぢや ハハハハハハハハ。』
とわらふものはまだよかつた。

『大驅りぢや、針のみぞから天をのぞくやうなことを云ひ前にして、金を集めやうといふ、大驅りぢや』——と中には彼の勤説に迫害を加ふる者さへあつた。

市九郎は十日間、徒らな勤進に努めたが、何人もが耳を傾けぬのを知ると、奮然として、獨力この大業に當ることを決した。

彼は石工の持つ鎚と、鑿とを手に入れて、この大絶壁の一端に立つた。

『到頭氣が狂つた！』

と通行人は市九郎の姿を指しながら嗤つた。

が、市九郎は屈しなかつた。山國川の清流に沐浴して觀世音菩薩を念じながら、渾身の力を籠めて第一の槌を下した。

ただ二三片の碎片が飛散つたばかり、

第二の鎚、更に二三片の小礫が、巨大なる無限大の大礫から分離したばかり……。

何か思ひたつ。一夜眠られないほど興奮する。

それを友人に語る。一言のもとに出来るものかと、つきはなされる。

力を落してやめる。第一の試練に落第したのである。

獨力で立て、笑はれてもいい。

了海がノミ一打もつて立つた、この意氣、彼は我等に何を語るか。

我等は今、この更生したる大惡人、市九郎否大願の前に立つて肅々と歩む聖者了海の前に嚴肅に何かを學ばふ。

人世は一体誰の手にあるのか。

眞のよろこび

彼は空服を感じれば、近郷を托鉢し、腹満つれば絶壁に向つて槌を下した。懈怠の心を生ずれば佛を念じて勇猛の心を振ひ起した。

一日、二日、三日、——市九郎の努力は間断なく續いた。

旅人は、その傍を通る度に嘲笑の聲を送つた。彼は嘲笑の聲を聞けば、更に鎚を持つ手に力を籠めた。やがて市九郎は、雨露を凌ぐために、絶壁に近く木小屋を立てた。朝は山國川の流れが星の光を寫す頃から起き出で、夕は潮鳴の音が寂靜の天地に澄みかへる頃まで止めなかつた。

彼の心には何の雜念も起らなかつた。

人を殺した悔恨も其處には無かつた。

極樂に生れやうといふ功利的な心もなかつた。

たゞ其處には全身全靈を打込んだ精進があるばかりであつた。

彼は出家して以來、夜毎の寢覺めに、身を苦しめた自分の悪業の記憶が、日に薄らいでゆくを感じた。

新しい年が來た。春が來て、夏が來て早くも一年が経つた。市九郎の努力は空しくはなかつた。大絶壁の一端に、深さ一丈に近い洞窟が穿たれてゐた。ホンの小さい洞窟ではあつたが、市九郎の強い意志は最初の爪痕を明らかに止めた。

けれども近郷の人々は市九郎を嗤つた。

『あれを見られい、狂人坊主があれだけ掘りおつた。一年の間もがいて、たつたあれだけじゃ。』

けれども彼にとつては、自分の堀り穿つた穴を見ると涙が出るほど嬉しかつた。夫は如何に淺くとも、自分の精進の力の如實の現はれであつたからだ。

噫、努力精進によつて穿つたこの洞窟

人生といふ大絶壁

汝は正しい意志のノミと努力の鎚とを持つてこの大絶壁にむかつて起ちたることありや。

而してその成された市九郎の喜びを感じたることありや。
彼は今、過去と全く相違した聖なる大樂のひらめきを受取つた。

唯奮闘

洞窟の外には、日が輝き月が照り、雨が降り嵐が荒んだ。が、洞窟の中には間断なき鐘の音のみがあつた。彼にとつては唯、右の腕を振ることのみが、彼の宗教的生活の凡てである。二年の終にも里人は猶、嘲笑を止めなかつた。

然しそれはもう聲にまでは出て來なかつた。ただ市九郎の姿を見た後、顔を見合はせて互に嘖ひ合ふだけであつた。

更に又一年経つた。槌の音に變りはない。山國川の水音と同じく不斷に響いた。村人たちはもう何も云はなくなつた。

彼等の嘖笑の表情は何時の間にか驚異のそれに變つた。

梳らざれば頭髮は、何時の間にか双肩を掩ひ、浴せざれば垢づきて人間とも見えなかつた。

自分の掘り穿つた洞窟の裡に、獸の如くうごめきながら、狂氣の如くその槌を振ひつづけてゐたのである。

里人の驚異は何時の間にか同情に變つた。托鉢の行脚に出かけやうとすると、入口に思ひがけなく、一椀の齋を見出すことが多くなつた。彼は托鉢の時間を更に絶壁に向ふことが出來た。

四年目の終りが來た。洞窟はもはや五丈の深さに達してゐた。しかしこの三町を越ゆる絶壁にくらぶれば、其處に猶亡羊の嘆があつた。

里人は彼の熱心に驚いたものの、まだ、かくばかり見えすいた徒勞に合力するものは一人もなかつた、市九郎は唯仕事三昧に入つて唯一人不斷の努力をつゞけてゆく。

『可愛さうな坊様じや、物に狂つたと見え、あの大磐石を穿つてゆくわ、十の一も穿ち得ないで、おのれが命を終らふものを。』

然し努力だ。一年たち二年たち丁度九年目の終に、穴の入口より奥まで、二十二間を計るまでに掘り穿つた。

一人の瘦せた乞食僧が九年の力が、樋口郷の里人たちに始めて、市九郎の仕事の可能性を信ぜしめた。

九年前、市九郎の勸進を擧つて斥けた山國川に添ふた七郷の里人は今度は自發的に開墾の寄進についた。數人の石工が市九郎の事業を援けるために雇はれた。もう市九郎は狐獨ではなかつた。

先づ狂人扱ひにされる。

そして聞くに堪えない、嘲笑や悪罵がなげられる。

それだけならいい、悪意の妨害さえ加えられる。

一年繼續する。依然としてそれだ。

二年たつ、口では罵らぬやうになる。

三年たつ、傍觀者が沈黙する。

四年たつ、彼等はまだ手を出さうとはしない。然し同情する。

五年たつ、何だか同情は親切に移り變る。

六年たつ、誰かゞ感心しはじめる。

七年たつ、識者の問題となる。

八年たつ、眞の共鳴者が出来る。

九年たつ、心を打ち込んだ援助者が出来る。

十年たつてもまだ、誰をも動かし得ない事業、それは人間に用事のない事業だ。

念願は人格を決定す。

繼續は力なり。

貴方の會は振ひますか。いや一向どうも、後退りで、衰へるばかりです。一体この邊の者は目が覺めないのですから……… いや費用がありませんから……… いや多忙ですか……… いや私どもの無力では………

敢て問ふ。一度でも、全身全霊を打ち込んだことありや、身代は勿論、食ふにも困るほど徹底的にやつた過去ありや。世の嘲笑をやがて沈黙せしめたる五年間の奮闘ありたるか。この奮闘の記録なくしては一切の事業成就することなし。

光明團生れて十有餘年、市九郎の心事を念ふて涙ぐむ。

雨の日も風の日も、私の心中唯、無力なる者の死者狂ひの奮闘があつただけだ。

光明誌がまだ騰寫刷であつた頃、授助者が誰もなくなつて、右手にまめが出来、やがて血が出るのを我慢してやつと毎号を出した頃のことと思はれる。

印刷費がたまつて身動きが出来ず、やつと送つた金は不心得の男の遊興に使はれて、困りぬいた日の経験、

書物を持つて古本屋に弟の學費を造りに行く日の悲哀、

五拾錢の金さえなくて、食事すら出来なかつた日の追憶、

弱い私を不斷に生かして繼續せしめた、大きな彼のみ心に合掌する。

而して私を助けて生かして下さつた多くの同胞たちに合掌する。

不退轉……………勝利

然し翌年が来た。里人達が工事を測つた時、夫がまだ四分の一にも達してゐないのを發見すると里人は再び落膽疑惑の聲をもらした。

『人を増しても、とても成就しない事ぢや。あたたら海どのに騙かされて入らぬ物入した。』

一人去り二人去り、遂に一人もゐなくなつた。又も了海の鐘を振ひつゞける音のみ聞える

洞窟が深くなるにつれて、市九郎の姿は人々の眼から遠ざかつた。市九郎の存在は里人の

念頭から屢々消失せんとした。彼の存在が里人に對して没交渉である如く里人の存在も亦市

九郎に没交渉であつた。彼の眼前の大岩壁のみが存在するばかりだつた。

市九郎が洞窟に端座してからもはや十年、暗瞻たる冷たい石の上に、座り續けたために、顔は色蒼さめ、双の眼はくぼんで、肉は落ち骨は露はれ、此世に生ける人とも見えなかつたが、彼の心には不退轉の勇猛心が燃えさかつて、ただ一念、穿ち進む外に何ものもなかつた

一人取残されてまた三年たつた。里人の注意は再びこの事業の上に注がれた。洞窟の深さ全長六十五間、川に面して採光の窓がうがたれ、もはやこの大岩石の三分の一は主として市九郎によつて貫かれてゐることがわかつた。

彼等は再び驚きの眼を見はつた。市九郎に對する尊敬の念は、再び復活して、寄進された十人近い石工の槌の音が、市九郎のそれに和した。又一年たつた。里人達は何時しか目先きの遠い出費を悔ひはじめた。寄進の人夫は再び彼の身邊から去つた。

傍に人がゐてもゐなくても市九郎の槌の力は變らない。彼はたゞ機械の如く渾身の力を入れて槌をあげて、振り降す。彼は一切を忘れた。過去の罪惡も、彼自身の一身さへも。

一年たち二年たち、一念の動く所、彼の脊腕は、鉄の如く屈しなかつた。丁度十八年目は遂に二分の一を穿つてゐた。

里人はこの恐るべき奇蹟を見ると、もはや市九郎の仕事を少しも疑はなかつた。彼等は前二回の懈怠を心から恥ぢ七郷の人に合力の誠をつくして擧つて彼を援けはじめた。その歳、中津藩の郡奉行が巡視して市九郎に對して、奇特の云葉を下した。三十人に近い石工が毎日

働いてゆく。工事は枯葉を焼くやうに進んだ。市九郎の態度に變りはない。

二十年に近い市九郎の奮闘は彼を全く不具者にしてしまつた。兩脚は長い端座に傷み、何時の間にか屈伸の自在を欲いで、僅かの歩行にも杖によらねばならなかつた。其上永い間、闇に端座して日光を見なかつたためと、彼の身邊に飛び碎けた石の碎片がその眼を傷つけた爲であらふ、彼の兩眼はモウロウとして光を失ひ、物のあいろも辨へかねるやうになつてゐた。

不退轉の市九郎も、身に迫る老衰を痛む心があつた。中道にして斃れることを何よりも無念に思つた。

『もう二年の辛抱じや』——と心に叫んで、懸命に槌を振ふのであつた。

民衆、それほど不可測で、あてにならず、又恐ろしい力を持つたものはない。

一寸感心すればついて來るのもこれである。力にしたかと思ふと去つてゆくのも民衆である。

光明團五週年大會、あの素晴らしい盛大な記念大講演會は誰がしたのか。

魔の手が動く。さつと去つて行つて、路傍に獨り戦はねばならなかつたのは誰がしたのだ。然し民衆は動かないやうに見えてこれほど正直なものはない。

大衆の力なくして出來た大事業が有り得るか。

眞に大衆を動かした市九郎二十年の孤軍奮闘、彼は今や、菩薩の聖座に不滅の光を掲る。

假令この事業が全部失敗に飯しても、彼の中に輝くものは不朽である。

彼は遂に勝つたのだ。

市九郎のために、非業の横死を遂げた中川三郎兵衛の一子實之助は、三歳の時自分の父が非業の死を遂げたことを十三になつた時に聞かされた。無念の憤に燃へた彼は、復讐の正義を肝深く銘じて、柳生の道場に入つた。十九の年免許皆傳を許されて直ちに仇討の旅に上つた。

彼は市九郎の所在を探して、馴れぬ旅路に、多くの艱難を経つ、全國至る所に漂泊の旅路をつゞけて、二十七歳になつた。江戸を立つて九年目、彼は九州地にわたり、中津の城下

に入つてから思ひがけなく、了海と名告る市九郎のことを知ることが出來た。

彼は洞窟の前に立つた。多くの怨敵が、囊中の鼠の如く目前に置かれてあるのを喜んだ。

その下に使はるゝ石工が、幾人かとも斬り殺すに何の雑作もあるべきと勇み立つた。

『其方に少し頼みがある。了海どのに御意得たいためにはるゝ参つたものじやと傳へて呉れ』

石工は洞窟の中へはいつた後で、實之助は一刀の目くぎを濕した。彼は心の中で生來初めて廻り逢ふ敵の容貌を想像した。然し暫くして實之助の面前に表はれたのは一人の乞食僧であつた。彼の想像は全く裏切られた。

夫れは出て來るといふよりも、墓の如く這ひ出たといふ方が適當であつた。夫れは人間といふよりも、むしろ人間の残骸といふべきであつた、肉悉く落ちて骨露はれ、脚は處々腫れて永く正視するに堪なかつた。破れた法衣に依つて、僧形とは知れるものゝ、頭髮は永く延びて皺だらけの額を掩ふてゐる。灰色の眼をしばたゝきながら實之助を見上げて、

『老眼衰へまして、何れの方とも辯へ兼ねます。』

實之助の張りつめた心はこの老僧を一目見た殺那、タジ／＼になつてしまつた。彼の前に

は人間とも死骸ともつかぬ半死の老僧がうづくまつてゐるのである。彼はこんな敵を求めてゐたのではない。しかし彼は失望の心を勵まして、

『了海とやら、如何に僧形に身をやつすとも、よも忘れは致すまい。汝市九郎と呼ばれし若年の砌、主人中川三郎兵衛を打て立退いた覺があらう。某は三郎兵衛の一子實之助と申すものぢや。もはや逃れぬ所と覺悟せよ。』

許すまじき嚴正な實之助の言葉の前にも市九郎は少しもおどろかなかつた。

『如何さま、中川様の御子息實之助様か、いや御父上を打つて立退いた者、此の了海に相違ござりませぬ。』

『主を打つて立退いた非道の汝を打つために十年に近い年月を艱難の裡に過したわ、茲で會ふからは、もはや逃れぬ所と尋常に勝負せよ。』

『實之助様——いざお斬りなされませ。お聞き及びもなされたろうが、之は了海奴が、罪亡ぼしに堀り穿たうと存じた洞門でござるが、十九年の歲月を費して九分迄は竣工致した。了海身を果つるとも、もはや年を重ねずして成り申さう。御身の手にかゝり此の洞門の入口

に血を流して人柱となり申さば、はや思ひ残すこともござりませぬ。』

實之助は、半死の老僧の言葉を聞いて敵として持つていた憎しみの心は消え失せてゐるのを感じた。

然し敵を討たねば江戸へ歸り家名再興のよすがはなかつた。

その時洞窟の中から走り出た石工たちは、了海の身の危急を知つて、身をかぼうた。そして實之助の前に石工の統領が進み出でて、

『お武家様もお聞き及びでもござろうが、此の隧道は了海様一生の大誓願にて、二十年に近き御辛苦に身心を碎かれたのじや。いかに御自身の悪業とは云へ、大願成就を目前に置きながらお果てなされること、如何ばかり無念であらう。我等の擧つてのお願いは長くは申さぬ。此のくりぬきの通じ申す間、了海様のお命を我等に預けては下さらぬか。くりぬきさへ通じた節は、即座に了海様を存分になさりませ。』

彼の誠を表はしての哀願はかなへられた。了海は再び中に入った。

實之助は初め石工たちに張番されながらも隙を伺ふて一刀のもとに斬ろうとしたことさへ

あつたけれども洞窟の奥深く、深更まで經を誦し、念佛しつゝ、槌を打ち下す了海の姿は、全
てこれ人間ではなかつた。喜怒哀樂の情を超えたい鉄槌を振つてゐる勇猛精進の菩薩そのも
のであつた。大刀の柄を握りしめた實之助はふと我に歸つて、既に併心を得て、衆生のため
に碎身の苦を嘗めてゐる高德の聖に對し、深夜の闇に乗じて獸の如く、瞋恚の劍を抜きそば
めゐる自分を顧ると、彼は強い戦慄が身体を傳うて流れるのを感じた。

それから間もなく、工事に従ひ石工の中に武家姿の實之助の姿が見られた。

夫は了海が樋田の絶壁に第一の鎚を下してから二十一年目、實之助が了海にめぐり會ひて
一年六ヶ月をへた、延享三年九月十日の夜であつた。

石工どもが悉く退いた後、了海と實之助のみ終日の疲勞にめげず懸命に槌を振つてゐた。
その夜の九つに近き頃了海が力をこめて振り下した槌が、朽木を打つが如く何の手筈もなく
鎚を持つた右の掌が岩に當つたので彼は『アツ』と思はず聲を上げた。その時であつた了海
のモウロウたる老眼には紡れもなく其槌に破れた小さき穴から月の光に照された山國川の相
が、歴々と映たのである。

了海は『おう!』と全身をふるはせて名狀しがたき叫聲をあげたかと思ふと、夫についで
て狂したかと思はれるやうな、歡喜の泣笑が、洞窟を物凄く動揺めかしたのである。

『實之助どの、御覽下されい。二十一年の大誓願、はしなくも今宵成就いたした。』と云ひ
ながら敵と敵とは、そこに手を執り會うて、大歡喜の涙に咽んだのであつた。が、暫くする
と了海は、

『いざ實之助殿、約束の日ぢや、お斬りなされい。かゝる法悦の眞中に往生致すは拙者の本
懐これにすぎるものはござらぬ。明日となれば石工共が防げ致さう。いざお斬りなされい。』
實之助は了海の前に手を拱いて座つたまゝ、涙に咽ゐるばかりであつた。心の底から湧き
出る歡喜に泣く凋た老僧の顔を見てゐると彼を敵として殺そうなどは思ひも及ばぬ事であ
つた、敵を打つなどといふよりも、此の弱い人間の双の腕に依つて成遂げられた偉業に對
する驚異と感激の心とで胸が一ぱいであつた。彼はいざりよりながら再び老僧の手をとつた
二人は其處に全てを忘れて感激の涙に咽び會ふのであつた。

覺めたる了海は敵となる實之助の前からも、逃げやうとはしなかつた。罪業を一身に荷負つて立つこれ救はれたる者の態度である。

彼はとう／＼二十一年の大奮闘によつて、この夢だといはれた大事業を成就した。一行を執持する所、萬徳を内具し、成就する。

何時の間にか、彼の全生涯は、尊き菩薩の聖壇におかれた。

この佛心によつて淨化された人間ならぬ人間には、敵の双さへ向けやうがなかつた。

彼の大菩提心も、大願成就も、もとは彼の半生の大罪惡から生れた。救はれたとは死んでゐた過去が生きて來てものを云ふことである。

彼の過去は全く清められた。

彼は今、崇高なる大歡喜の中に敵の心さへ融かして行つた。

一切の恩讐を越えた彼方に萬人共に生くべき世界がある。彼はその世界の不滅の光を生きてゐた。

噫。彼岸、其處からは萬人の上に不斷に何ものか流れ、おとづれ、よびかけてゐる。この

光に生きる者いくばくぞ。(菊池寛氏恩讐の彼方による)

利休の最後

利休の最後

豊臣秀吉は下賤よりおこつて、遂に天下をとり今は聚樂の邸に榮華を極めた生活をしてゐる。その頃のことであつた。

彼は一日、南禪寺に遊んだことがある。

時は春の眞盛り、櫻花は歴亂として雪のやうに風に散る。静かに行列が進んで黒谷をすぎる。

丁度其時一人の婦人が、下僕をつれて、これも亦同じく花を賞してゐる。前驅傳呼の聲が

『下におれ！ 下におれ！』とあたりを拂ふ。

さつきの婦人はおどろいて花の蔭にかくれた。

關白は輿の中からちらつと見た。

花によりそう美人の姿、容姿艶麗、花の人か、そもまた美の精か、ぼうと眼さえまぶしくて見られない様である。魂まで奪はれた、關白のかほが思はれる。

『あれは一体誰の女ぞ』

關白は家來に問はせるとその僕は答へた。

『茶の宗匠、利休の女で御座います。近頃夫を失つて孤樓をしてゐるもので御座います。』

秀吉の心は動いた。何時も出入する利休の女が、かてて加へて、近頃夫を失つて淋う暮す

——益々以つて都合がよい。すぐに輿にのせてつれ販ることにしやう。さう思つた關白は

親切丁寧に口説きはじめた。しかし女は、きつぱりことはつて言つた。

『御親切は誠に有難うございます。しかし妾は近頃、良人を失ひ、寡居の寂しくも、毎日毎

夜唯泣いてゐる者でございます。どうして關白のお側で御仕へ致すことが出来ませう。』

きつぱり痛快にはねつけた。我がものと思ひきつてゐた關白秀吉の自信は裏切られた彼はこれがために魂をうばはれて、芒々然として販つた。

しかしこの事件はこれで解決がついたのではなかつた。たちまちその父利休の頭の上に彈壓が下つた。

女を求められた利休は、

『苟くも女の意志をまげて關白の意に従はせたならば、利休は娘を賣つて奇利をむさぼる奴だといふであらう。茶道はそのまゝ道である。世の俗塵を超越したる茶道の宗匠と云はれる者が、金儲けのために娘を賣つたと云はれたならば、一代の恥辱である。假令關白の命とあつても應ずるわけにはゆかぬ。』

彼は固く辞退して従はない。

秀吉の心は快々として樂まない。しかしこれを如何ともすることは出来ない。

しかしかうした事があつた時、御機嫌取りが表はれ

『關白よ、利休は誠に不都合の奴でございます。彼は自分の像を刻んで、それを大徳寺の山門の上に置いたさうでございます。』

これを聞いて、甘言で失敗し、威壓、高壓で失敗した秀吉の心には怒の炎は、燃え上つた

「何だ！ 大徳寺の山門に………ウーン悪き奴！ 大徳寺の山門は、一天萬乗の天子もお通り遊ばし、諸の身分高き公卿たちもお通り遊ばすぞ、然るに何事ぞ、茶坊主の分際で、自分の木像を山門の上におくとは、容赦は相成らぬぞ！ 無禮者奴が今に見ておけ！」

怒つてゐる時、更に油をさしたものがあつた。

「彼、利休は公の茶道具を盗んで我物としてゐます。」

關白の怒りは心頭に徹した。さうなつた時は、もう理非曲直はわからない。人を遣はして死を賜ふた。我儘勝手、追従悪口、間違つた断定、死刑宣告、随分の間違ひである。

その死刑宣告の特使が行つた時、利休は弟子の宗嚴と一緒に一室で茶をたてゝゐた。

「その方、利休、不都合の數々により關白秀吉公よりの御下命、死を賜つたぞ、覺悟召され！」

利休は驚いた様子さえない。會釋したまゝで茶儀を靜かにつゞけた。靜かに茶がすむと、彼は起ちあがつて、茶器その他の道具を、親しい人々への記念に分ち、亂れたる様子もなく思ひ残すこともないものゝやうに従容として切腹してはてた。

克己至難

天下を策略と智謀とで得ることが出来、天下の英雄に勝つことが出来た太閤の、遂に一婦人の誘惑に克つことが出来なかつた。

更に彼の劣情と忿怒とに克つことが出来なかつた。

克己することは至難である。

けれども克己の上に築かれた事業だけが永遠である。

花影の美人

花のはらく散る處

其處に容姿艶麗の美人たつ

關白秀吉ならずとも、男子の痴情をそゝるに充分である。

甘言、誘惑の手がのびる。

斷乎として、はねつけた所、一種の痛快をおぼえる。
 榮華の門は開かれた。しかし日夜忘れることの出来ない亡夫のみ靈を欺き得るか。
 權勢の手がのびる、しかしそれに服従するか否かは自由である。
 か弱き一婦人とあなどつた關白の芒々然たる醜態、
 畢竟彼も一個の凡夫である。

其意を奪ふべからず

生活の價値は絶對である。

何ものもそれを蹂躪することを許さない。

意志は永久に自由である。

關白の權勢を以つて、なほ一婦人をどうすることも出来ぬ。

生活の權威は自由意志によつて支へられる。

權勢、金力、はては暴力をもつて、其意志を奪はふとする。罪惡が其處に生れる。

自由意志の上に立つて動かねば匹夫と雖、亦英雄である。
 必然の徳であり、至高の善である。

勝 敗

關白秀吉は形の上では利休に勝つた。

死刑を宣告せられるも靜かにその弟子と茶を點じて従容たる所、彼は太閤よりも強かつた。

功利主義を棄て

毀譽褒貶を超越し

生死すらこえて、彼が彼の意志に忠實なる限り、彼には永遠に敗北はあり得ない。

魔 手

運命の青い魔の手、それが花見る日にも、頭上にあらはれる。

強者となるか、弱者となるか。それは汝に與へられた謎である。勝つか、まけるか、汝の自由である。結果を思はず、死すら覚悟して道に生きる者は眞の英雄である。心霊の英雄の前には、如何なる毒爪も永久に無力である。汝にこの英雄たるの覺悟ありや。

眞 愛

我が娘の正しい生活、意志の自由を尊重するためには、死を賜ふも敢て辞せぬところに親の眞愛がある。便宜と、勝手と、盲愛のために、親の無理を強いて、それを聞くか聞かぬかによつて、孝不孝を決定しようとする、世の無智なる親には、利休の心事はわからない。

諂 偽

心の卑しい男がおる。御機嫌をとるために、他人を死まで陥れるやうなことを告げる。如何なる世界にもかうした小人がある。お側にこの巧言令色にして魂の腐つた家來を使ひ、政治をあやまつた者いくばくぞ。關白の怒につけこんで、更に油をさし、ひそかに機嫌をとり得たと思ふ心事、唾棄すべきである。無實の罪、泣いて見た者にだけ、無念に燃ゆる利休の心事がわかる。彼とても人である。腹だつ心は誰にもある。その時靜に恥じる心、反省の世界だけにほんとの道がさゝやかれる。

因果の 小車

利休の女に芒々然たりし心、すぐ淀君を求めた心である。淀君は彼によつて亡ぼされたる淺井氏の女であつた。秀頼の一命も絶對であれば、利休の一命も絶對である。

克己を知らずして女色に溺れ、怒にまかせて利休を殺す心事、
即ち大阪城没落の大因である。

大阪城の没落、否天下をあげて謝するも、利休一人を殺した罪をまぬかれることは出来な

5。

己に出でたる者は己にかへる。

茶 道

利休は一茶道の達人であり、其創始者である。

魂をこめた以上、茶道の中にも天地を封じ込めた尊厳さがある。

藝術の幽玄に生き、神祕の清風に乗托す。

現時の茶儀、單なる骨董いぢりでなければ幸である。

大命將に終らんとするや

悔懼こもぐ至る

大命將に終らんことを或るや悔懼こもぐ至る

大命將終^ニ 悔懼交至^ニ。不豫^ニ修善^ニ、臨窮^ニ方悔^ニ

悔^ニ之^ニ於後^ニ、將何及乎^ニ。

——大無量壽經——

大命將終

『大命將に終らんとするや』

悔懼こもぐ至る。

豫め善を修せず

窮るに臨みて方に悔ゆ

之を後に悔ゆとも

將何ぞ及ばんや。』

それはまだ刑務所を監獄とよんだ頃の日監獄に十年間出勤して、百五十人の死刑囚を取扱つた某氏の述懐である。

『旦那！俺は近い内に死刑れますわい。……………なぜつて、昨日今日は飯が喉を通りませぬわい……………どうも鳥の鳴聲が違ひますよ。』

監房の前を通る監守たちにそう告げるのが大方であつた。いよ／＼死刑の日が来る。死刑の言渡しがあつてから大概一年、司法大臣から死刑執行の電報がとどく。いよ／＼死刑執行の日が来ると、監守たちが、つれに行く。その日であることがわかる。百人が百人、鉄の格子にかたくさばりついて片手をはなせば片手、その監房を出まいとする。今日まで毎日、許された時間に運動場に出て散歩することを、まるで縛られた犬が放たれた時のやうに、あれだけ喜んで飛び出した監房だのに。然し拒んでも逃げやうとしても力の前には如何とも出来ない。両手を後に親指二本がたく／＼られる。死刑だとわかつた時、船に乗つたやうに、足の裏はもとにつかない。やつと助けられて刑場に歩む。絞首台の下には、すでに桶がすえて

あるのが見える。

典獄、検事、書記、醫師、教諭師等々がならぶ。

『何年何月何日、××控訴院にて判決申渡されたる死刑を唯今執行する！』

『典獄の宣告、その殺那から被告は、天を仰ぎ地に伏して、聲を限りに泣き狂ひつゝ、『どうぞ助けて下さい……………』と哀願する。死刑囚は引き立てられて刑場へ、そして絞首台の上に階段を上に登る、筈の上に坐らされる。哀々たる許しを乞ふ聲腸をしぼる。氣の弱い官吏は出席し得ないといふ。百五十人の死刑囚中この哀願をしなかつたものは、僅かに兩三人であつたといふ。

『遺言はないか。』寸陰の命すら延ばさうとする囚人たちは、一つ述べ二つ述べてやまない教諭師が説教する。然し唯哀願歎訴の聲のみで、おそらくは聞えないらしい。

やがて目をふさがれる。綱が首にかゝる。『今一目、娑婆を見せて下さい。たつた一分間でもいいのです。見せて下さい。』其聲や血をばくやう。

辞世の歌をいはせる。大概の者が何とかいふ。一秒でも長生きしたい心から。一句云ふ。

『まだある！』然しコトン最後だ。

山桶を足で盛にコトン／＼とつく。呼吸をしようとするや、肩は波のやうに動く。然し十分二十分その足もだらり、呼吸も絶える。

殺人強盗、彼がそれをなす日、この『大命將に終らんとするや、悔、懼、こも／＼至る』ことの百分の一でも考へたら……。

『きはまるに臨んで方に悔ゆ、之を後に悔ゆとも將何ぞ及ばんや。』

何たる痛烈なる文字なるぞ。無自覺なる我等の最後を刺して完膚なし。

山田憲氏の最後

この話を聞いた私は歸るとすぐ、濟世軍發行の『信に生きた人——山田憲氏の信仰』をもう一度出して読みふけた。彼は農商務商技師農學士であつて鈴木辨藏を殺して死刑になつた人である。七人の方々によつて書かれた百五十頁の中からぬき書きして見る。

東京監獄の中での藤井教誨師と山田憲氏との對話からはじめる。

『山田さん眞田さんからの電報ですか。御差支え無かつたらお見せ下さいませぬか。』

『え、どうぞ』——さう云つて、山田は手を伸して机の上に置いたまゝ置いてある二通の電報を取つて、藤井師の手に渡した。

『散る櫻、残る櫻も散る櫻』

『散る時が 浮ぶ時なり 蓮の花』

藤井師の額にある太い二三本の線は暗く動いた。…… 數日來の新聞は、春が暮れゆくと共に、山田も近いうちに梢から離れて、散りゆく花と共にその生命を斷たれると云ふことを書いて、或る一部の人々の心の同情を誘つた。——眞田氏も九州の果路で、この新聞を見たのであつた。而してこの世の名残に、切めては彼の生きてゐるうちに、別れの言葉を送つて置かうと思つて、電報を打つたのであつた。

『藤井先生。ほんとうに散る時が浮ぶ時ですね。以前には、私のやうな者は終生浮ぶ時はないと斷念めてゐましたのに、先生の御導きによつて今でははつきりと佛の慈悲を知ることが

出来ました。私は眞田さんにも感謝致します。先生にも感謝致します。私の周囲の人達、私の運命を育て、呉れた凡べての者に向つて、私は今感謝したい気持ちになつてゐます。」

『山田さん私は貴方が今日のその御境地に達せられた御聰明に對して驚嘆せずにはゐられませぬ。貴方の御一生は確かに世の光となりませう。』藤井師は下を向きながら靜かに云つた。『これも皆先生の御力で御座います。汚れたこの身の儘で、如來の慈悲の本願に只管に頼り行く自信の出来ましたのは、先生の御人格の力で御座います。私は私自身の法悦の心を喜ぶと共に先生に無限の感謝を捧げずには居られませぬ。實際あの頃先生がゐて下さらなかつた場合の事を考へますと、それは思つた丈でも私には怖ろしいことで御座います。あの頃の私の一歩前には身の破滅が大きな口を開いて私を待つてゐたのですから。私がそれから救はれたことは、全く先生の御力です。』と云つて山田は聲を吞んで了つた。

藤井氏は云ひ出す時は今だと思つた。

『山田さん、私は昨日までは貴方の所へ、如來のお使となつて参りました。ほんとうに樂し

う御座いました。それに引き換えて今日の私の苦しさは、山田さん……今朝は……魔の使ひとなつて参りました。』

『え、？』山田は、只一言口を開いただけであつた。

『山田さん、長い月日の間御交際をさせて戴きました。身にしみて嬉しくあります。然れど今日は愈々貴方と長いお別れを致さねばならぬ時になりました。』と云つて藤井師は下をうつ向ひて了つた。

『山田さん、思へば長い間の御交際でしたね。私は今まで足らはぬ身とは思ひながらも貴方から師と呼ばれてゐました。然れど今日からは貴方は私の師です。私は貴方の弟子です』藤井師の聲は、聲帯にからんでよく出なかつた。山田はもう何時もの平靜に歸つて、自分の前に悲しい遺瀨のない心で涙ぐんでゐる藤井師のために小さな聲を立て、『南無阿彌陀佛く』と念佛を稱へた。

『山田さん私は貴方の遠いお旅立ちの日に、嬉しいお消息をする事の出来るのをせめてもの

慰めに致します。山田さんお母さんやお妹さんの御消息です。貴方の遠いお旅び立の日に晴れのお衣です。」と云つて一枚の晴衣を出した。

『さうですか。有難う御座います。』と云つて山田はその衣を手に取つて凝然と眺めてゐた。彼の瞳は睫毛の露で見えなくなつた。而して彼の眼の中には六十の上にもなつた母の老ひやつれた姿や、不幸な兄のために一生をつまづかせられて了つた妹の姿が浮んで来た。而して微かな燈火の下で、二人が涙に頬をぬらせ乍ら、親は子を思ふ心、妹は兄を慕ふ懐しい心で一杯になり乍ら、併れどもお互に黙り合つて死出の旅路に着く自分の今日の晴衣を縫つて呉れた時の寂しい光景が思出されて来て彼は今更に別離の悲哀をヒシ／＼と胸に感じた。

『では先生、失禮して着換えますからと云つて山田は寂しく立つた。而してその顔には自然な平和な微笑さへ浮べてゐた。着換え終つた山田は、嘆きに沈んだ藤井師に對して、

『藤井先生、私にはこの世の中が假の世の中であると云ふことが今判然と分ります。私は只今お迎への輿に乗つて寂光の輝く都へ行くのです。私の心には無明の闇から脱がれたと云ふ感じが判然とあります。私は今喜びに充ちてゐます。どうぞ先生、私の嬉しいこの日にその

様に嘆いて下さるな。』……………彼は刑場へ歩みを運んで行つた。

時計が十時を指した時、彼は身に新衣をまとふて、微笑さえ含んで、刑場の側なる阿彌陀堂に静かに歩みを運んだ。居並ぶ係官に一掛すると野口典獄は涙ぐんでこゝに改めて本日執行の旨を言渡された。彼は唯『ハイ』とのみ首を垂れた。然も報謝の稱名は彼の口から絶えなかつた。其態度は少しも亂れず、また悪びれもなかつた。典獄は更に關係辯護士一同の企望として宮島辯護士よりの傳言を傳へられた。即ち、

一、人格者として立派な最後を遂げてくれ。

一、子供(みち子)の事は關係辯護人で十分心配するから安心せよ。

一、親戚一同は勿論吾々關係辯護人も死後は十分菩提を弔ふから大往生を遂げよ。

と告げられた。彼は一々首肯した。而して最後に言々肺腑より出づる言葉にて、犯せし大罪を懺悔し、かゝる身に加はる情の厚きを心から感謝し、今や極樂往生間違なき身となつて従客として死に就くことの出来る身の幸を感謝した。更に自ら進んで『せめて死体を解剖に

付せられ學理上の資料ともなれば分外の幸である。』とて白紙に楷書で左の解剖願を認めたとて………死体解剖願を略す………

余は彼に懷中名号を授けて佛前に導き、讀經後禮拜焼香せしめた。供物と茶をすゝめるとそれでは死出の首途にと餅菓子一つと茶二杯に咽喉を濡した。彼の從容として少しもせまらざる態度と又人間の心をしつくりとみつめてゐた事に涙ぐまざるを得なかつた。而も彼は衷心より感謝しつゝ、

『私は順調であつたら或は世間の名聲を博したかも知れません。けれども臨終には如何ばかりか悶え苦しまねばならんだかも知れません。然るに今や逆縁が因縁となつて、極樂往生間違ひない身とならせて戴きし事を心から喜びます。』

としきりに感謝の念佛をたゝえた。其時彼の顔には云ひ知れぬ法悦が燃えてゐた。

『然らば先生 極樂でお待ち致して居ります。』

との言葉を殘して靜かに刑場に引かれた。

山田氏が四月二日愈々死刑場に引かれて行かれる時一歩一歩はいかに嚴肅なものであつたでありませうか。其の間の時間はいかに山田氏にとつては尊いものであつたでありませう。櫻の花は今を盛りに上野、向島では世間のさわぎのあるその裏に此處獄庭では、あたら嵐の前の花の如く物の哀をとめてゐたのであります。

花散る四月の二日、

典獄『何か此の際云つておく事があれば、何なりと聞いて君の意志に添ふ様にしてやるから………』

山田氏は微笑をもらし、やをら顔をあげ、一禮しつゝ、

山田『有難う御座います。別に申上げることはありませんが、私は只今は絶對他力の信仰に生きておりますから今日の死は、少しも恐れて居りません。私はあれだけの大罪を犯したのでありますから今日あるは寧ろ當然のことと考へております。依つて今は人も恨みず、天も恨みず、從容として死に就く覺悟であります。何も申上げることはありませんが、此

の二年間閣下をはじめ皆様方に一方ならぬ御厄介になりました。誠に有難く感謝いたして
おります。どうぞ皆様によりしくお願ひ致します。私は今は唯謝罪と感謝の外何物もあり
ません。どうぞ皆様によりしく願ひます南無阿彌陀佛』
何處までも眞實なる自己の姿を見失はず、みにくき自己の弱き心を彌陀の弘誓の船に托せ
られし心は今や彌陀の心と一味になつたのであります。

大最終！

典獄『今やどうでせう。』

山田『莞爾として今は全く平常と同じです。少しもかわりはありません。私はこの事がなか
つたら屹度、物質に斃れたに相違ありません。今日精神界に生きることが出来て死ぬのは
實に感謝に堪へません。』

愈々用意萬端調ひたれば、僅かに三十二歳の花の蕾をあたら刑上の露と消へんとする其際
も、

山田『皆さん御免なさい。南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛』

ゴトーン——

嗚呼遂に山田憲氏の肉は永遠に逝つた。然し魂は永久に甦る、時に大正十年四月二日午前
十時四十六分、天は曇る。

絶對他力の大道に一身を托し、私有の山田氏は亡び公有の山田氏が生れました。私有の佛
陀は亡び公有の佛陀が生れました。私有の親鸞聖人は亡びて公有の親鸞聖人が永遠に生れま
した。

彼は死に際して何の遺言もなく、又辞世の句も残さなんだ。又特に聲高らかに念佛も稱へ
なんだ。たゞ自然のまゝに、其處に何の飾つた處もなく少しの力味んだ跡もなく、寂寞の情
もなく、恐怖の念もなく法悦に充ちて平生のまゝに死を見ること歸するが如くであつた。

大無量壽經ノ會座 將ニ終ラントスルニ際シ

佛。彌勒ニ告ゲテ曰ク爲得大利
爲失大利

大悲ヲ信ズル者ハ即チ大利ヲ得、信ゼザル者ハ
即チ大利ヲ失フト 不肖天下ニ罪在ルモ本願ハ
悪人ヲ正機ト

喚ビ給フ 至茲 報謝ノ稱名相續セザラント

欲スルモ豈ニ得ベケンヤ 嗚呼有難哉

煩惱即菩提ノ境

彼はかうした手紙を數氏に送つた。それが地上の最後の名残として。

以上は山田憲氏に關するものの拔書きである。悪人山田憲罪を犯して、聖者山田憲死刑となる。國法は彼の肉体を死刑となし得るも彼は遂に何ものよりも超越して自由であつた。彼はよく彼に還つたが故に、彼は彼を超越した。我を眞に超越するものこそ、眞に我に生きる

のである。多くの死刑囚は最後まで何故に二重の苦を苦しまねばならなかつたか。多くの死刑囚が遺言を辭世をのこすのに、彼は何故にそれをのこさなかつたか。考へることの多い二つの世界ではある。——噫 大道なる哉。

父の最後

父の最後

念佛

四日の朝日は登りました。しかし萬一を頼む我等の心は永遠に裏切られて其處には衰へたまへる父上を發見せなければならなかつたのです。

急病です。それに重態です。たつた一昨日から床につかれたのです。昨日の夕方にはまだ實を云ふと全力を注げば助かるといふ空氣が濃厚でした。加計の佐々木が『ちえ子をどうしてもよばねばいけないでせうか。幼子を二人もつれてゝすから萬一のことがない以上出て來られません』と云ひます。妹である智慧子にすらまだこの様子であつたのです。とてもこれきりであらふとは思はなかつたのです。

77
然るに四日の朝になつて、無言の中に私たちは助からないのだといふ心がおきて來ます。又々方々に電報が飛びます。この朝いよく看護婦は二人になりました。酸素吸入をはじめ

ました。この日もリンケルの注射が行はれます。この日の朝、私たちの出生地原村から前岡の兄が来ました。それを告げるとお父様は返事しました。十二時には加計の妹が来ました。しかし其時には、お父様と妹との間には、もう通ずることの出来ない、永遠の鉄扉が下されてありました。

噫——

謙語のみのお父様、お父様はどんなに肉体が苦しむのでせう。又しても起きやうとしますその度に皆は困りました。皆が困ると私が行きます。

『まあ、そう言ふな。私をおこせ、おきてもいゝじやないか。お便所に行かしてくれ。』
昨日も今日もさう云ひます。其處に私が行つて、

お父様。兄が来ましたよ。兄ですよ。動くとおとが苦しいから静かになさいよ。』

と言へば『さうかの』と云つて静まります。強い者が二人でお父様の手をとつてゐます。おきたいでせう。体が痛むでせう。それだのに動かして差上げることは出来ないのです。

地上のなつかしい現実がお父様から遠のいてゆきます。かうなつた時、お父様から一切の

記憶も、智覚も、判断も、苦樂も失はれてゆく時、其處に残つたものは何なのでせうか。
念佛と讀經

さうです。お父様はうはことの形で、病勢が進めば進むだけ、お念佛の口だけ動かし
お念佛の間はお經です。

『……………又舍利弗。極樂國土。有七寶池。八功德水。充滿其中。池底純以。金沙布地。四邊階道。金銀瑠璃。玻瓈合城。上有樓閣。亦以金銀瑠璃。玻瓈磚瓦。赤珠碼瑙。而嚴飾之。池中蓮華。大如車輪。青色青光。黃色黃光。赤色赤光。白色白光。微妙香潔。舍利弗。極樂國土。成就如是。功德莊嚴……………』

と阿彌陀經をあちこちと間違ひなくよみあげます。そして又お念佛します。

『うはごとのお念佛が何になるか』

と人々は言ふかも知れません。しかし私は裏返して味はせて貰ひます。うはごとになつた時こそ、平素一番深く培はれたものが出て来るのではありますまいか。お父様。主治醫も看護婦さんも『こんな方は今日までなかつた』と申されます。

おゝあの熱にうかされつゝも笑める顔、あのお念佛、これが大説法でなくて何でせう。信仰は事實です。百の説法も、高い議論もそれが事實でない時には、私どもの頭はさがりませぬ。つぶさに人間苦の試練を経て幾十年間培はれた、金剛の信念が、今や死の巖頭に立つたお父様を買きます。うはごとくなればこそ尊いのです。嬉しいのです。

——お父さんは、今、病んでゐます。

——お父さんは今、苦しんでゐます。

——お父さんは今、意識を失つてゐます。

けれども、さうしたお父様の背後には、病むことなき、生も死も、苦も樂も超えた如來が生きてあります。私にはそれが拜める。

おゝ——久遠の父よ。

私は地上のお父様を通して、永遠のお父様、大悲の如來を拜みます。あゝ遂に肉の父は、

うはごとの父は、永遠の慈父と一体にまします。

父上が悩みたまへば、悩みたまふほど、心の眼に、それがうつる。かくて父上は或は今度を最後に、お浄土に還りたまふのではありますまいか。

十方來生

心悅清淨

已到我國

快樂安穩

幸佛信明

是我眞證

發願於彼

力精所欲

十方世尊

智慧無碍

常令此尊

知我心行

假令身止

諸苦毒中

我行精進

忍終不悔

と又しても嘆佛偈の後の方が出ます。さうしてお念仏が出ます。時には和讃を口づさみま
す。

一一のはなのなかよりは

三十六百千億の

光明てらしてほからかに

いたらぬところはさらになし。

十方微塵世界の

念佛の衆生をみそなはし

攝取して捨てざれば

阿彌陀となづけたてまつる。

(阿彌陀經讚)

生死の苦海はとりなし

ひさしくしづめるわれらをば

彌陀弘誓のふねのみぞ

のせてかならずわたしける。

(高僧和讃)

等の和讃が平素すきなものでしたか、お口から出ます。

あゝしかしそれも亦だん／＼と侶列はぼんやりして來ます。聲はうすれてゆきます。はて
は念佛の聲のみ明瞭に残ります。

夕方になると吉村博士が再び來診されました。昨日の夕方と何といふかはりかたでせうか
昨夕は明らかに答へた父が、今日はもう何を云はれても何とも答へませぬ。

二時頃に臺愚狂さんが來た頃にはまだ、よべばかすかに答へてゐたものを。

吉村博士が歸られると、水蛭が百五十匹、藥店から買はれて來ました。見るさえ嫌な蛭が
耳の後に牛乳をぬつて、つけられると見る間に血を吸ひはじめました。蛭は見る間に太つて
來て數十匹が一かたまりになつて、見るもおそろしい有様になります。血はだら／＼と頸を

流れます。太つてく／＼小指ほどになつて落ちる蛭は瓶にとられます。さうしてお父様の頭部の鬱血をふせがうと云ふのであります。

長田のあさの叔母が龜乃さんにつれられて病氣をおして来たけれども、お父さんは遂にそれには一言を發しはしませんでした。お父様を慕つて来た妹が、

『兄さん。……あさのが来ました。あさのが……兄さん。哀れなすがたに……』
感情強い叔母は聲を立て、泣きます。皆な新しい涙にさそはれます。しかしお父様は、微に返事をするらしいばかりで、叔母を満足さす何者もありません。叔母の落膽、傍の見る眼も苦しい御座います。叔母は四時間の自動車で嘔吐ばかりして来たのです。

夕方になると川戸から高橋の伯父(母の兄)が来て下さいます。賀茂郡から臺一乘氏が来て下さる。

お父様！ 今やお父様の枕邊には三十幾人の方々が熱心こめた看病をつゞけて下さいます

絶望

四日の夜、お父様はいよ／＼危篤に頻して來ます。電報が出ます。來ます。

重苦しい夜が暮れて、更けてゆきます。もう水をのむ力も、藥をのむ力もありません。とすれば全くの昏睡状態に陥ろうとします。お側にゐた釜瀬さんはペンをとつて次ぎのやうに書きました。

永遠の勝利者なる

お父様——あなたが床におつきになつてから今日は四日目です。そして今は夜の十一時です。

戸外では夜鳴きうどんの鈴の音と寂滅を物語るやうな虫の音とが聞えるだけであります。涙にぬれた心でペンを握つて見ました。

高熱におかされた中から無意識の中にもれる稱名が又しても新しい涙を誘ひます。

念佛者であつたお父様……

醫師はそれとなく死を豫告して歸りました。然しそれと同時にそれは、淨土にかへること

の出来る榮光をもつお父さんには、生への宣言なのでありますそしてそれは救ひの成就される輝きの日なのであります。

法に生きたお父様………

すべてを如來におまかせしてゐなされたお父様………

私たちの執着してゐる肉体は今や滅びやうとしてゐます。滅びざるたつた一つの貴いものを教えつゝ人間の手のとゞかぬ時が近づいて参ります。そして佛様の手にお渡しする時が。

お浄土におかへりなさるであらうお父様。紫船の捧げる四つの心持をお受取り下さいませ

○おめでとう御座います。

○すみませんでした。

○御苦勞様でありました。

○有難うございます。

あゝお父様——夜が更けます。あなたのお念佛と私の涙のにじみと微かな虫の音と、無言の説法のみこのは聖壇であります。

聖者たりしあなたのみ前に座しつゝ………可愛子 紫船

釜瀬君がこんなことを書いてゐる頃、お父様は又も

『假令身止 諸苦毒中 我行精進 忍終不悔』

とお経がはじまります。時々もう間違ひがおこります。側から合唱すれば、お父様は間違ひなく申されます。

たつた一度お父さんは皆を涙の中に笑せました。それはお父さんが、

『………酒はね、病の………もとゝなる………』

と磯節を二度ほど歌ひました。間もなくお父さんは静まりました。唯聞ゆるものは苦しうな呼吸の音と、酸素の出るブル／＼といふ音のみであります。

四時間宛三組に分けられた人々は、或は寝、或は看護してゐます。私が丁度夜半に階下におりて、食事しておりますと、上つて見よと云ひます。急いで上りますとお父様は、はつきりと返事をしました。妹も叔母もお父様兄様と耳に口をよせてお名をよびました。しかし聞

もなく父も意識は失はれてゆきました。そうしてこれを限りに永遠にお父様は深い昏睡の底に沈みはてしまひました。夜中十二時頃に父もリンゲルの注射が行はれました。かくて昏睡に沈んだお父様と一緒に私たちは五日の朝を迎へねばならなかつたのです。

朝の間、お父様はお念佛をとなへました。しかしもう聲は出ませぬ。僅に口が動き、微に稱名が聞えるばかりです。

お父様——お父様は地上で舌の根の動く間如來のみ名をよびつゞけました。もうお父様のみ聲は聞えなくなりました。唯お口が動くだけなのです。

お熱はだん／＼下つて五日は、三十八度から五分の間でした。しかし脈膊は百内外にのぼつたきりです。リンゲルの注射も二回せられました。然しもうお父様は全く絶對なのです。

其夜中井先生が福山からお見舞に來て下さいました。

焦燥と不安との間に六日を迎へました。六日になるとお父様のお脈は百三十をうつやうになり、お熱も再び三十九度を出しました。もう私たちは一厘一毛の疑もなく、お父様が明日の内に往生なさることを信ぜねばならなくなりました。呼吸は益々苦しうなります。かくて

いよ／＼七日の夜は明けました。お父様の容態はいよ／＼危篤に陥つて、お脈と呼吸の記入表は全く亂れちがつてしまひます。死はわかつてゐました。しかしお父様の腕をとる時、數多いながらも脈は規則正しくうつてゐます。私たちは未だ治療の手をゆるめることは出来ません。まだお父様は呼吸してゐます。動いてゐます。酸素の吸入は續けられます。二人の看護婦さんは昨夜から全く眠らないで見てください。

主治醫が午後來て下さつた時、私たち兄弟は相談の結果、死に臨んだお父様の体にリンゲル五〇〇と葡萄糖二〇〇を注入して貰ひました。お父様の体は、昨日一回リンゲルをぬいたために、水分のきれることをおそれたのです。出来ることなら、天壽を全うせしめたい。病氣のためや、自然消滅ならまだいゝけれど、水分のために殺したくはなかつたのです。秋作も敬三も、意見一致で、更にリンゲルを注射して貰つたのです。私たちはもうこれで思ひおくことはなくなつたのです。時に午後四時です。

お父様の呼吸はいよ／＼迫つて來ます。

大往生

『皆な早く来い！ 食事してゐる者を早くよべ！』
皆な枕邊に集つた。

切つたやうな呼吸が、吸ふ息だけになる。もうこれだけか、又少しよくなる。

『遠山先生に早く電話を……』

一分二分いよ／＼お父様は變る。でもお脈は矢張り規則正しく微にうつ、

お、地上の最後か。

お父様――

お父様は遂に再び『兄や』と呼んでは下さらないのですか。

お口に水をつける。

荒い／＼呼吸の音。

主治醫が來られた。

急いで診察の仕度が出る。

『ご隠居さんは私が來るのを待つてゐられたのです。』

あれ／＼様子が變だ。

『先生早く來てお父様の御手をおとりなさい。唯今です。』

私は再び父の手をとる脈はまだ正しくうつてゐる。

呼吸が――

氷囊はとりのけられた、胸は開かれた。聴診器をあてられた胸は、波のやうに動く、

見よ―― 臨終斷末魔

一つ二つ三つ………かくてお父様の呼吸はとまつた。

お体が不規則に二三度動く、でもまだ心臓は動いてゐる。

五秒十秒――

『唯今、お心臓も動かなくなりました。』

眼は開く。

大きな呼吸たつた一つ、
死！ 死！！ 死！！

お父様よ お父様

お父様は永遠に去りました。

萬事休す矣。

よべどかへらず。叫べども甲斐なし。

噫。父は永遠に逝きましぬ。

夢か現か

此一瞬………喜怒哀樂全てなし。

時昭和二年九月七日午後六時十分

我にかへる。涙がとめどなく流れる。

『お父様！

お父様！

ながくお世話になりました。

有難う御座います。』

苦惱にみちた七十四年の一生

光を追ふて求道の尊き七十四年の一生

我等七人の兄弟に捧げられた七十四年の一生

如來に救はれた法悦の一生は、噫。遂に終焉の幕を下してしまつた。

このみ手は誰がために節くれだつてかたくなつたか。

このみ足は誰がために、かたくも節くれだつてかたくなつたか。

あゝこの皺は誰がためによつたのか。

お父様――

温かつたお父様。

よく人をゆるしたお父様。

責めなかつたお父様。

求めることの少なかつたお父様。
すみませぬ〜。

お父様の息が絶えて間もなく涙の中に、皆が嘆佛偈を誦へました。主治醫遠山先生も、看護婦さんも集つた。二三十人の人は皆合掌しました。經文の一句々々がお父様を中心に、生ける如來のみ光にとかされて一つになりました一切はお父様に相似はしい。

お父様は遂に成佛されたのです。

間もなく看護婦さんの手によつてお体はクレゾール液でふかれ身すくろいもすんで、綺麗に洗ひたての浴衣に着かへました。

静かな〜何の苦もない寝顔です。氷嚢もなく、枕もとりかへられて、すつかり平素のやうになるとお父様は平常のすがたにかへつて來ました。

何といふ静かな寝がほでせう。

枕邊には、香の煙がかほりたかく静かに〜ゆれてゆく。

大自然に親しむ者

大自然に親しむ者

大きな石の顔

北米合衆國の小説家、ナサニール・ホーソンの『大きな石の顔』といふ作の梗概を紹介する。

一人の母と其子誠之助とは山の中の盆地に住んでゐる。

其盆地からは、遠く隔てた山の麓に、大きな石が列び重つて、遠くから眺めると、それが丁度人の顔の形に見えて来る『大きな石の顔』とはそれをいふのである。

子供たちがこの大きな石の顔を自分の前へ置いてだん／＼大人になつて行くといふことは仕合せなことであつた。なぜかといふに、その眼鼻や口のつきは氣高く、その様子は大まかで優しく、丁度一切の人類を自分の感情のうちへ抱き込んでなほあまりあるやうな、ひろ／＼とした温い心の燃え上つてゐるやうであつたから。ただそれを見ただけで、一つの教育に

なつた。

子供の誠之助は、丸太小屋の前に坐つて其母から『大きな石の顔』について話を聞く。

この盆地では昔から一つの豫言が次ぎ次ぎと云ひ傳へられた。

大体の意味は、いつか將來この近所へ一人の子供が生れて来るが、その子供はその時代に一番、賢い尊い人物になる運命をもつてゐて、大人になると、その容貌はこの『大きな石の顔』に生き寫になつて来る。といふのであつた。

今では、此盆地の人たちは唯毎日の事におはれて、ほんとうにくだらない話に過ぎないときめてしまつた。

この話を聞いた誠之助は、

『あ、お母さん、ねお母さん、わたしはその人の来るまで生きてゐたいものだ。』と云ふ。

母は情愛の深い老のよい女であつたので、小さい子供ののんびりした希望を挫かなかつた。そして云つた。

『その人に會へるでせう。』と。

若者は丸太小屋で育つて、仕事しながらおとなしい落着いた神妙な若者になつた。野へ出て骨折れ仕事をするために、顔は日に焼けたけれど、その眼もとに輝く智慧は立派な學校で學んだ世の子供たちの及ぶところではなかつた。けれど彼には、あの大きな石の顔が教師であつただけで外には教師といふものがない。毎日の仕事が終わるときつと、二三時間も、石の顔を見つめて、しまひにはこちらから尊敬して、見てゐると、石の顔も自分の方を見て親切な笑と勇氣を與へてくれると思つた。

大成金

此盆地に一つの噂が立つた。

大きな石の顔に似たゑらい人が出たと。此盆地に住んでゐたことのある若い男が遠國の貿易港で商業をして大成功をし、非常な大金持の商人になつた。山のやうな身代、あらゆる寶貴なダイヤモンド、眞珠、黄金の山、そんな數へきれぬ財産を持つて大成金はこの盆地に

かへつて靜に晩年を過さうと決心した。立派な御殿を立てさせるために、優れた建築家が来る。口では云へぬ大理石の大建築が出来る。全ての美、全ての華、金と銀とが室内に燦として相映い。人人の口は愈々石の顔に似た大人物が歸つて来ることばかりに使はれた。

とうとう其日が来る。黒人白人の召使の長い一隊が来る。誠之助はいよいよ長い間の望が達せられる日の来たことを喜んで見物に出てゐる。彼が山の方を見返すと何時もの通り大きな石の顔は親切に誠之助を見返してくれる。四頭だての馬車は威勢よく走つて来た。馬車の中には年老つた黄色の皮膚をした男が見える。

『大きな石の顔に生き寫だ。』と人々がさはぐ。

誠之助は大きに迷つた。

大成金は、路傍の女の乞食たちに、飾貨を放りだしてやつた。

誠之助ばかりは、似もつかぬ大成金の顔を見て失望し力を落した。

落ちかかつた夕日を受けた山の石の顔は其溫和な唇を動かして

『その人はきつと来る。心配するな。誠之助そのえらい人はきつと来る。』と云つてゐるやうであつた。

血雷老将

又何年かの月日は立つた。誠之助はもう立派な青年だつた。

仕事に熱心で、人に親切で、よく精を出して働く、義務を怠らぬ青年だといふ外には、山に行つて例の石の顔を毎日見る以外に別に變つたところはないと村の人たちは見てゐた。けれど、かの石の顔が自然に青年の心を開いて、他の人よりも、同情ぶかく、本で學んだものよりも一層よい智慧が出て來、一層立派な行ひが出て來ることを知らなかつた。

誠之助自身も、彼がたつた一人ゐる時に自然に湧いて來る思想感情は、他の人たちと一緒にゐるときよりも、ずつと氣品の高いものであることを知らなかつた。

その内に大成金は氣毒にも死んで土の中に埋められてしまつた。

死ぬる前から、財産が無くなつて、たゞ皺だらけの黄色い皮膚で包んだ生ける骸骨と、落

魄れた商人の賤しい人相とが残つてゐた。山の脇のあの氣高い石の顔との間に似たところもないことは勿論のこと。

大理石の御殿は旅行者のホテルに變つた。

この頃また此盆地は盛な評判でにぎはつた。

血雷老將といふ渾名をとつた勇將が今度、この故郷の盆地に歸つて來るといふのである。しかも其武勳赫々たる老將軍の顔は、かの『大きな石の顔』とそっくりだといふのである。老將軍のかへる日は來た。禮砲がうたれる。傳令使が來る。人氣はすばらしいものであつた。血雷老將がかへつて來ると、大園遊會が開かれ。あまり人が多いので、誠之助にはこの待ちに待つた名高い來賓の顔は見えぬ。

風に翻へる勝利の國旗、

護衛隊の銃劍の音、

續く祝詞や、演説や、雷のやうな萬歳の聲。

『全く瓜二つ割だ。』

『ほんとうにまあかう似るのも不思議』

『よく似たもの、あの人こそほんとうに古今を通じての最大偉人だ。』

と人々が湧きかへるやうだ。

『そら將軍だ、將軍だ、靜にしろ、いま血雷老將の演説がある。』といふ聲がする。老將はあらゆる讚美の中に立つた。

肩の金筋が光る。そして同じ方角に森の間から例の大きな石の顔もよく見えた。老將の顔は似てゐたらうか。

あはれ、悲しや。誠之助は、それを認めることが出来なかつた。

戦争に倦みはてた、艱難苦勞をした顔つきに、なほ元氣のある鉄のやうな意志は認められるけれど、高い智慧と、深く博いやさしい同情とは全くなかつた。

『これは豫言のなかの人ではない。さうすると、まだまだ待つてゐなければならぬ。』と云ひながらあのなつかしい、慈愛のこもつた石の顔を見た。

今日にかぎつてことさら夕日に輝く顔は、
 『心配するな誠之助、少しも心配することはない、その人はきつと来るから。』と云つてゐるやうであつた。

大政治家、大統領の石顔翁

誠之助はいま中年の男となつた。

彼は人の知らない深い徳と、高い智慧の持主であつた。身分こそ賤しかつたが、この男が生きてゐるために、世の中がいくらかづゝ善くならなかつたといふ日はたゞの一日もなかつた。彼は自分の道を進む以外に、一步もわきへ逸れなかつたが、それでも始終その恵が隣近所の人へ行き渡るのであつた。

自分でも知らない間に一方では説教者になつてゐた。飾氣のない純な高い考が形に表れて行ひとなり、言葉となつて人間の行ひを鍛へあげてゆく。けれど人たちは決して彼がえらいとも思はないでほんに、友だちの言葉として聞いた。

血雷老将の毒々しい人相は石のかほとは似てゐぬことを人々が知つた頃再び、世の中は騒ぎ出した。

此村から出た一人の大政治家があつた。唯一枚の舌をもつてどんな藝當でもする大政治家一度叫べば、戦争の爆發であり、平和の歌である。世界中にひびき渡る大雄辯。とう／＼彼は其舌一枚で大統領にならうといふのである。しかも其政治家は石顔翁といふ渾名で知られた人である。

石顔翁の故郷訪問、盆地は大騒動となつた。

石顔翁の来る日だ。

騎馬行列、制服の士官、議員、州の執行官、新聞記者、何といふ盛大な、何といふ立派な光景であらう。美しい音楽につれて、狂つたやうな出迎への人たちの間へ、彼の大政治家はかへつて来た。

『萬歳、石顔翁萬歳』

『そらそこへ来た。見ないか、石顔翁と老人山の方を、まるで双子のやうだ。』

華々しい行列の真中ごろに、四頭の白馬に轆かれた馬車の中の大政治家を見た誠之助は、『あら、似てゐるか知らん』と思つたけれども、どことなく足らないところがあつて、その凹んだ眼の洞穴の奥の方に、絶えず陰氣な疲れを帯びてゐて、丁度自分の玩具よりも大きくなりすぎてしまつた子供か、又はえらい才能があつても、眼のつけどころが小さくていつも立派な手並を見せるにかかはらず、一度も高い目的が實質を與へないために、その一生を空々寂々に過してしまつた人のやうであつた。

『ちつとも似てゐない。』

誠之助は失望して鬱ぎこんだ。

騎馬行列や、旗行列や、音楽隊、馬車などが通りすぎて、砂塵がしづまると大きな顔は、ふたたび、その幾世紀だか知らない昔から具へてゐる雄大な姿をもつて、眼の前に現はれて来た。

『こつちだ。誠之助、わしはここにゐるよ、お前よりもわたしの方が、待ちこがれてゐるのだ。しかしまだ疲れはしない。心配するには及ばないぞ、その人はきつと来る。』

とそのやさしい唇が云ふやうだつた。

X

それから長い年月は立つて、誠之助の頭にも霜をいたゞき、額には物体のある皺が出来た。彼は年を老つたけれどむだに年老にはならなかつた。

尊い智慧は増して今はもう世にかくれた者ではなかつた。

多くの人が求めてやまない名聲は求めず願はずして来た。彼の名は世界中に知れて来た。大學の先生や、大都會のえらい人たちがわさ／＼彼を訪ねて其話を聞きに来た。なぜといふに、この質朴な農夫は外の人とちがつて、本などから得たのでなくて、もつと／＼尊い高い調子、穩で親しみ易い氣品のある調子から得た考へを持つてゐるといふ評判が廣く行きわたつた。どんな人をむかへた時でも、彼は優しい眞心をもつて迎へてなんでも自由に話した。

其頃或大都會には、この盆地の生れであるところの、大詩人があらはれて、あの『大きな

石の顔』の威嚴のある唇で歌はれても恥かしくない位の立派な詩で故郷の山や、石のかほを讀めた、へた。

この詩人が一つ山を歌へば、すべての人間の眼は、前に見た時よりも、一層雄大な氣が、その山腹に休んでゐるか、その山頂に飛び廻つてゐるのを認めた。その題材が瀾であれば、天人の笑ひがすぐその上に落ちて永久に水面に輝いた。これが太古からの大海であれば、この深くて底の知れない恐しい水までが歌の情に動されていよゝ高くうねるやうであつた。

誠之助は、ついこの詩人の作る歌に親しみはじめた。毎日小屋の入口に腰をかけて例の石のかほを見ながら、その歌を讀んだ。

魂が動かされるやうな句へ來ると、

『ああ尊い友よ、この人こそあなたに似てもよいでせうか。』
とつぶやいた。

ところが此詩人も、誠之助の習はないで得た智慧と、立派な淳朴な生活とを、知りたいものと思つてゐた。

ある夏の朝、その世界的な大詩人は、この盆地に來て、誠之助の家に厄介にならうと戸口に立つた。見ると人好きのよい老人が本を一冊もつて、とき／＼よんでは、真心こめて、大きな石のかほの方を見つめてゐる。

二人はすぐ仲のよい友達となる。二人とも相手の心の尊く美しいのにおどろいてしまふ。二人の同情は、一人ではどちらも持つことの出来ない深い意味を互の心に教へあつた。二人の心は一つの琴糸へふれて、それがどちらも自分の音であると云ふこともできないし、又自分の音と相手の音を區別することも出来ないやうな、いかにも心持のよい音楽を奏するやうだつた。

誠之助は、石の顔を見ながらきいた。

『あなたはわたしに取つては、珍しくも天から授けられたやうなお客様ですが一體どなたで

ゐらつしやいます。』

『あなたはその詩をお読みになるのですか。それでは私を御存じです。それは私が書いたのですから。』

誠之助は聞いて熱心に其客のかほを見直し、それから『大きな石の顔』を見、又客、又石の顔、心配さうに何度も見たが、彼の顔は自然に俯向いた。

頭をたれて溜息をつく。

客の詩人が其譯を問ふと、誠之助は、

『わたしは一生涯、あの豫言の現れて来る時を待つてゐました。そしてこの詩を読んだ時、この詩をつくつた貴方こそと思つてゐました。』

『あなたは私があゝの直な石の顔に似てゐるだらうと思はれたのですか。それに望みが又はづれたので失望なさつてゐられるのです。私はとてもこの向ふの慈悲に富んだ顔に似るほどの値打はありません。』

私の思想！

なるほどその中には神に觸れたところもありませう。時には遠く響く天の歌の調子が聞きとれませう。けれども私の生活はこの思想と一致してゐないのです。たゞ夢で終りました。なぜつて、私は賤しい憐れな現實のなかで日を送つてゐたのですから。

私の詩が人生と自然界をよく發揮してゐるといふことですが、私はその雄大とか、美とか善とかに對して信念を欠いでゐます。何で私のかほが似るものですか。』

二人の両眼には涙がうるむ。

日が暮れる頃誠之助は、毎日の通りに近所の人たちに話をしてやる、美事な草木にかこまれた自然の説教壇に彼の詩人と共に行つた。

誠之助の説教は口からの出まかせではなかつた。力のある中味の多い人生そのものに清らかな愛の生命をふきこむものであつた。

詩人は誠之助の人物と品性は自分のこれまで書いたものよりも、もつと高尚な調子を具へ

た詩であることを感じた。詩人の眼は涙に輝きながら、この尊敬すべき長者を見上げて、こんな立派な上品な聖者の様子をした者はどこにもゐないと思つた。と其時、あなたに黄金色の夕日を受けながら立つてゐる大きな石の顔を見た。慈悲深さうな石のかほと、白髪をたれた誠之助の尊く輝くかほとを見くらべて詩人は思はず、

『見よ！ 見よ！ 誠之助さんこそ、大きな石の顔にそっくりだ。』
すると一同はよく見つめた。

豫言は實現されたのだ。

しかし誠之助は、話がすむと詩人の腕をとつて家にかへつた。心の内ではやがて大きな石の顔に似てゐる人で自分よりも、もつと立派な人が出るだらうといふ希望を抱いて。

X

自然は我等の最高の師である。

見よ、緑の衣つけたる大空に聳ゆる山を。

見よ、青く高く澄る蒼穹を。

見よ、燃る太陽を。輝やく星を。

見よ、一度も同じ姿せぬ雲の大きさを。

見よ、緑葉繁る谷にかゝる瀧の美を。

見よ、野の花の蕊を、大洋の神秘を。

大自然より、無言の教育を受けることよつてみがかれた智慧は何物によつても得られぬ智慧である。

最後の日 完

昭和七年二月十五日印刷
昭和七年二月二十日發行

『最後の日』
定價 三十錢

著作兼發行者
住岡都三

印刷所
大日本
東京 光明團印刷部

發行所
廣島市八丁堀二六番地
大日本眞宗 光明團出版部
振替口座下關二三〇八番

住岡狂風著 眞理への道

定價 五拾錢
送料 四錢

住岡狂風著 惱める女性の胸に

定價 三拾錢
送料 二錢

釜瀬春芳著 吼ゆる心像

定價 壹圓
送料 不要

團歌集 釣鐘草

定價 十五錢
送料 二錢

光明團機關雜誌 「光明」 月刊

一部 金十錢

發行所

廣島市八丁堀二六番地 光

明團本部

振替下關三三〇八

終

